

# カトリック 仙台教区報

2003年4月20日 No.151

発行  
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

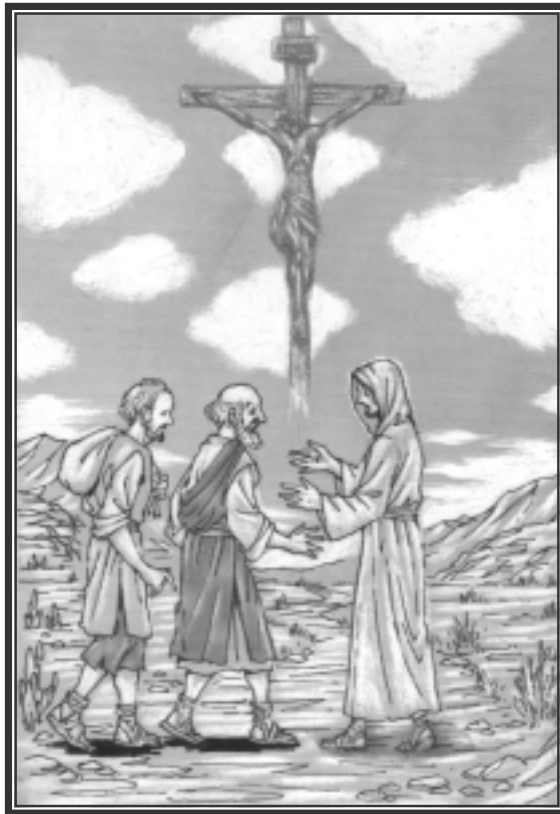
発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

## 時のしるしを見極める

仙台教区 司教 溝部 脩

第二ヴァチカン公会議は、仰と理性の目で見据えた「人がい  
「時のしるし」ということを話 たのである。年老いた教皇ヨハネ  
している。さて、「時のしるし」 二十三世である。彼は今こそ「時  
とは何をさすのだろう。公会議 のしるし」が見えると言明したの  
の時代、即ち一九六〇年代東西 であつた。それが「地上に平和を」  
の冷戦構造は厳 としてあり、ベル  
リンの壁は東西 を完全に分断し、  
その合間合間に キューバのミサ  
イル事件とか、ケ  
ネディー暗殺と  
か、ベトナム戦争  
とかという地域  
紛争が絶えず、核  
戦争がいつ起こ  
つても不思議ではない状況で  
あつた。この緊張の中にある  
「時のしるし」を見て、平和な  
ど到底望むべくもないという  
絶望の見方が圧倒的であつた。  
ところが、東西が分断し、永久  
にこの状況が続くかと思われ  
たその時に、「現在と未来を信



神であり、神の手の中に人間の営  
みがあるということを感じていた。  
「きつと」、または「必ず」神が  
より良き善をもたらしてくれると  
いう楽観主義が根底にあつた。こ  
の「きつと」、または「必ず」と  
いう想いが歴史を変えていくので  
ある。振り返ってみると、この  
「きつと」、は「必ず」という想  
いを抱いた人たちが  
世界の構造を変  
えたのであつた。  
それから四十年  
を経て、あの頃の危  
機が去っているこ  
とに気づくのであ  
る。現在も今年初め  
から困難な事態が  
世界を脅かしてい  
る。この現実の前に  
「必ず神はなして  
下さる」という想いを強くするこ  
とが、現在を生きる私たちの最初  
の課題なのである。  
しかし、同教皇は「信仰と理性  
の目で」という表現を使っている。  
この「理性で見据える」とは何を  
さすのだろうか。一人一人が、人  
格の尊重に徹する、人間が平等で

(一九六三年)という回勅であつた。

この危機的様相の前に佇んで、  
人は自分の思惑だけに頼つてもは  
やなす術がないと諦めたのであつ  
た。神が「その上にある」という  
ことを忘れ去ってしまった。ヨハ  
ネ二十三世は、世界を動かすのは

この危険の様相の前に佇んで、  
人は自分の思惑だけに頼つてもは  
やなす術がないと諦めたのであつ  
た。神が「その上にある」という  
ことを忘れ去ってしまった。ヨハ  
ネ二十三世は、世界を動かすのは

あることの確信を深める努力、人  
権を何よりも大切に考える、これ  
らの努力が平和への大きなうねり  
をつくるのである。このうねりが  
東西の壁を崩壊させ、独裁制を打  
破したのである。「神がなして下  
さる」とは、単なる他力本願では  
ない。ヨハネ二十三世が見ていた  
のは、このうねりであり、このう  
ねりの中に葛藤し、希求している  
人々であつた。この人々を通して  
「必ず」平和が実現するという  
確信なのである。実に四十年を経  
て、多くのことが実現しているこ  
とに気づくのである。同教皇は、  
このうねりを作る人々を「霊的感  
性」に富む人という表現を使つて  
いる。霊性のことをさしている。  
霊性とは、現代の諸様相の中に  
あつて神の前に人として尊厳をも  
つて生きることをさしている。現  
代の困難の前にも、絶えざる平和  
への努力を個々人が続けること、  
これが霊性を生きることであり、  
より良き世界を生みだす最大の要  
因となるのである。

イラスト 東仙台教会 佐藤勇次  
【残滴】は、今回お休みします。

# 司教館建設順調に…

完成まであと一カ月  
四月十日(木)、暖かな日差しに誘われて、司教館の建設現場を訪ねてみた。

外観はほとんど完成し、落ち着いた外壁の色が、周囲の緑に見事に溶け込んでいた。

建設の進む司教館の中に入ると、木

材のにおいが心地よく鼻をくすぐった。忙しげにたち働く

業に従事する人々。梁や柱に塗料を塗る人。器具類を取り付ける人、資材を搬入する人など、どの工事現場でも見かける風



景である。なのに、あの鼻を突く塗料のにおいが全くしない。ただ木の香りのみである。

壁紙はドイツから取り寄せた物で、汚れたら何度でも塗料



中庭から小聖堂を臨む

を塗れば元通りにきれいになるのだそうだ。

居室の漆くい壁は、麻や、わらが細かく刻んで混ぜ込んだもので微妙な凹凸が光をやわらかく反射し、室内の湿度を調整する働きがあるという素材。

八角形の小聖堂、東西南北の四面の壁には、ステンドグラスが埋め込まれ外からの光に美しく輝いていた。

五月十四日(水)、引き渡し。家具類の搬入や、引越しが行なわれる。

六月七日(土)、落成式の予定である。  
(岩井)

完成間近な司教館小聖堂に、溝部司教お手持ちのステンドグラスが見事によみがえり、その輝きは歴史的なものが生きるような味わいで、見る人々の心に強い感銘を与えています。

つばきの花模様のレストランが、長い間平戸の田平(たびら)教会で、歴史と共に輝いてきましたが、教会入り口の部分を残してイタリアのステンドグラスにすべて入れ替

が出ています。長崎のステンドグラスは、明るく光の遊びがあり、直接的な光でなく、間接的に光が和らいで心を落ち着かせるといった特徴があります。

## = 歴史の輝き = 司教館小聖堂のステンドグラス



月設計の高田さんは、ステンドグラスがあるのを知らないで設計をしたが、出来上がりは八角形の小聖堂に非常によくあつた形になった」ということでした。

溝部司教は司教館小聖堂が、「現代人のオアシス、自分を見つめるような祈りの場になつて欲しい」と話されています。

(中西)

このステンドグラスは、司教様が二年前、長崎・平戸を訪問された折、サレジオ会の浜崎神父の従兄弟のお宅で偶然見つけられ、いただいて来られた物です。

傷みの部分は仙台在住の五十嵐沙予(さよ)さんによって修復されました。

専門家の話によると、今この色ガラスの色を出せる人はいないというほど価値あるすばらしいものだそうです。

長崎のステンドグラスを世界遺産に登録しようという話





「第二の開所」  
ラ・サール・ホーム  
ラ・サール会 石井 恭一

三月の下旬にNHKから「ラオ深夜便」で五十数年間にわたる時代の流れの中でのラ・サール・ホームについてインタビューに答える形で話すように依頼を受けました。事前収録も終わったのですが当日放送直前イラク戦争の関連でプッシュ大統領の演説が急に入ることになり放送が延期になりました。プッシュと石井では勝負にならず目下別の放送日を決めている段階です。そのため放送前にその内容を文章で発表はせずに、表題のようなことを書くことにしました。このことも放送の一部には入っています  
が……



えではなく時代の要請に応じた児童養護施設をめざしたものとされたのです。

児童福祉の分野も戦後の五十数年間に大きな変化を見せしてきました。いわゆる戦災孤児、浮浪児を対象とした施設から、少子高齢化時代の中での児童養護施設になってきているわけですが、児童福祉法も改正され単なる生活の世話をするだけでなく、その子どもたちの将来を見越しての自立計画と訓練も要求されるようになりました。そして子ども達は少子化に伴

う小規模家族の中で起きた大人たちの複雑な人間関係に巻き込まれ、大なり小なり心が傷ついた状態で入所してきます

ので、この子ども達の心の癒しに充分に配慮する必要があるのです。また施設全体としての在り方もずいぶん変わってきました。従来の施設は運営については自力でなんとかやっていますといわゆる「自己完結型」の考えでしたが、今は地域の方々が助けていただき、また地域の中の一員として施設の子とも共に地域の子とも達の「子育て」にも参加しますという「地域福祉」の考え方が日常的なものになってきたのです。

広い役割を果たしていきけることと思っております。今のところ園舎の方は六月には完成し、国や市の検査を受けた後で引き渡しが行われ、夏休みを利用して子ども達が移動する予定です。子ども達の移動の前に一定の期間を設け、皆様に内部をご覧いただけるように考えております。

ということ、昭和二十三年の開所時代を知っている私にとって、今回の全面改装は、まさに「第二の開所」という思いなのです。

司祭叙階六十周年  
ベトレム会  
G・シュトルム神父

このような変化を踏まえて、新しく造られるラ・サール・ホームは「自立訓練室」、「心理療法室」、「親子訓練室」そして「地域開放交流スペース」を持つています。また室内体育館もバスケットコート一面を持つたものになりますので、地域開放交流スペースと共に地域の中で今までよりもっと幅の

四月八日(火)、盛岡ベトレム会本部において、G・シュトルム神父の司祭叙階六十周年、マックス・エンデルレ神父の司祭叙階五十周年の祝いが行なわれた。溝部司教を始め岩手県の全司祭が参加し、共同司式のミサ【写真】(右)シュトルム神父(左)エンデルレ神父の後の

昼食を共にしながら祝いの会が開かれた。



六十周年を迎えたシュトルム神父は、岩手県での宣教の種々の思い出を披露。同師は一九四七年四月十八日、スイスの故郷で叙階され、中国宣教に従事した後来日。岩手県でその業績を高く評価され、昨年来五つの表彰を受けている。中でも、二千本以上の苗木を種から育て、コツコツと一人で植樹を続け、身をもって自然を守る大切さを伝えてきた業績は岩手県民の注目を浴びている。  
なお、エンデルレ神父の五十周年の祝いは、十二月に教区主催で行われる予定。

# 焼失から一年、新校舎の完成を祝う

## 会津若松ザベリ才学園小学校

「昨年一月に起きた火災で、校舎の約三分の一を失い、関係者一同に暗い影をもたらした。約五億円。」

保護者を始め、同窓生、後援者一同に暗い影をもたらした。保護者を始め、同窓生、後援

人々の温かい励ましと協力でなくとも応援しよう」と立ち

支えられ、新たな希望と光明が上がった市民団体などが、一億

見出すことが出来た。」と、ジ円を超す寄付を集めた。

ヤニン・フランシ木材株式会社自然素材をふんだんに使った環境

再建工事は昨年八月六日ににやさしい教室、床暖房や自然

起工式が行われ、次第に校舎の姿が現れるにつれ子ども達の

心にも夢と希望が育まれた。

三月六日、新校舎が完成、溝部司教を迎えて祝別式、二十九

日には落成式を行い、校舎の完成を祝った。

校舎は鉄筋コンクリート二階建てで、延べ床面積約二千四

百四十平方メートル。教室の仕切りをなくしたオープンスペースを

採用した。一階にはパソコン教室・図書室、学習室が一体とな

ったマルチメディアセンター、二階には家庭科や理科などの

授業が出来る総合特別教室があり、身障者用トイレやエレベ

ーターの設備もある。総工費は

約五億円。

保護者を始め、同窓生、後援

者一同に暗い影をもたらした。保護者を始め、同窓生、後援

人々の温かい励ましと協力でなくとも応援しよう」と立ち

支えられ、新たな希望と光明が上がった市民団体などが、一億

見出すことが出来た。」と、ジ円を超す寄付を集めた。

ヤニン・フランシ木材株式会社自然素材をふんだんに使った環境



光を取り入れた人にやさしい教室に生まれ、子ども達も保護者たちも新たな希望と、神や支援者への感謝の心で満たされた。

### 山頭神父様と語る

#### 青年のつどい

三月十八日(火)、元寺小路教会において仙塩地区の青年な

ど約二十名が集まり、フィリピンで活躍しておられる新潟教

区の山頭神父様をお招きいたしました。

神父様は、日本人とフィリピン人の結婚支援やスラムに暮

らす人々の自立支援などの活動体験を交えながら「フィリピ

ンに一度来てください。必ず学ぶものがあると思います。私自

身、行き詰まったときにフィリピンを訪れ、自分の人生を生き

る力、何があってもいらっしやいと云える精神力を蓄えるこ

とが出来ました」と語られました。

参加した佐藤さんは「フィリピンに行ってみていな、という

のが話を聞いて思った素直な感想です。実際に行ったことも

ないし今の情勢を考えるとテロもあつたりと、治安も悪いか

もしれません。でも、信者の数も多くて暑い中、一日に十回も

ミサをするなど、本当に大変な毎日なのに、早くフィリピンに

帰りたいたいという山頭神父様。一体どんな場所なのだろうと、フ

イリピンに行かないと感じ取れない人々の「smile」に私は

すごく惹かれるものがありました。」と話してくれました。

カテドラル

枝の主日

四月十三日(日)、聖堂前のテラスは約二〇〇人の信徒

で埋め尽くされた。エメ神父の司式で枝の祝別が行われ、

侍者の子供達によって枝が一人ひとりに配られた。会衆は

暖かな春の日差しを浴びながら、「シュロの葉を手にもつて



(御供)

### 聖香油のミサ

四月十六日(水)聖香油ミサが仙台教区の司祭出席のもと溝部司教司式でとり行われた。

ミサの中で、病者の油、洗礼の油の祝福。叙階・堅信の為の香油が聖別【写真】され、司祭

の誓願の更新、二人の神学生の朗読奉仕者選任式が行われた。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。

して聖堂に入った。





